備陽史探訪
第 102 号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

備後ゆかりの歴史人物伝

会長　田口　義之

もう六年になるが、平成七年の暮、一冊の本を上梓した。昭和六十三年の秋から福山リビング新聞に連載した『備後ゆかりの歴史人物伝』である。

初め、この連載は一九回ほどで終る予定であった。ところが、その後「もう少し」「もう少し」ということで、結局一五〇回連載することになってしまった。

週一回の連載というと、楽なような気もするが、その実大変であった。この連載は、備後に「ゆかり」のある歴史上の人物ということで、古代から近現代にわたる備後の歴史を賑わせた人物を約一四〇人ほど紹介した。

古いところでは、帝釈原人から馬取貝塚人、古代吉備穴国の人々、卑弥呼ももちろん取り上げた。この辺りまでの執筆は比較的楽であった。現地を訪ね、その上で想像をめぐらす。元々想像力だけは恵まれていたから、気楽なものであった。

時代が奈良・平安と移って行くと、「ネタ」探しに苦労した。この時代、地元に残る史料は皆無に近い。中央の文献に時折登場する備後人を関係する史跡とからめて紹介する。

奈良・平安期の備後人で一番印象に残ったのは、「正倉院文書」に登場する物部多能である。多能は神石郡志麻郷戸主物部水海の「戸口」で、「正倉院文書」に確か七回ほど名を残している。最初は写経所の職員として、最後は沙弥慈数という僧侶として。興味を感じたのは、この人物が何故出家したかという問題である。もちろん純粋な信仰がそうさせたということも考えられる。ところが、この人物、写経所の職員としてはあまり良好な勤務態度ではなかった。そして、写経所より借金をし、後には職員から外されているのである。こうした人物が何故僧侶になったか。それは借金と税金を逃れるため、としか考えられない。

◇

中世に入ると、まず、『平家物語』に出てくる備後人に注目した。中でも面白かったのは奴可入道西寂である。この人物、平家方の総大将として伊予河野氏を一度は討伐に成功しながらも、油断から備後鞆浦で河野氏の奇襲を受け、あえない最後を遂げる。驚いたのは、この人物に子孫がいたことである。新聞を読まれた方からお手紙をいただき、私が入道の子孫に当たること、先祖のことを紹介していただいて感動したこと、などが縷縷述べられていた。

事の真偽は別として、人というものには先祖があり、また子孫がいるということを実感した出来事であった。

◇

鎌倉・室町期の人物を紹介する中で思いあたったのは「鞆」という港の重要性である。

備後の中世史を語る場合、逃すことができないのは、室町幕府の将軍足利氏と鞆の関わりである。建武三年五月、足利尊氏はこの港で光厳上皇の院宣を受け取り、朝敵の汚名を返上して天下を取った。しかし、尊氏から十五代目の将軍義昭は信長に追われ、この地に来て、毛利氏を頼って再び天下に号令しようとした。だが、この夢は秀吉の台頭によって朝露のごとく消えていった。「足利氏、鞆に興り鞆に滅ぶ」と言われた由縁である。

◇

鞆の重要性に気がついたのは、実はこの連載が終った後、別の連載（「クローズアップ備陽史」『商工福山』）に取りかかってからである。

福山城の歴史的な意味を考えていくと、どうしても「鞆」に突き当たる。勝成は何故神辺城を捨て、福山城を築いたのか。この古くて新しい課題は鞆の歴史的な役割を抜きにしては語れない。鞆に関わりを持った歴史上の人物をピックアップするだけでも、一冊の書物が出来あがる。

私の歴史人物伝で紹介しただけでも、鎌倉時代の二条（『とはずがたり』の著者）から現代の宮城道雄まで十人以上に上る。また、この連載では取り上げなかったが、坂本竜馬や頼山陽など江戸から幕末にかけて鞆に足を止めなかった有名人は皆無と言っていい。

◇

さて、私に与えられた紙面も残りわずかとなってしまった。編集子の要望は「私の好きな歴史上の人物」である。が、このような要望にはい

つも戸惑う。

浮気性かどうか、好きな人物はその時その時で違うのである。今、某紙に水野勝成の伝記を執筆中だが、勝成伝に出てくる徳川家康、織田信長、豊臣秀吉みな好きである。家康は、以前はきらいであったか、勝成との関わりで調べてみると、これほど魅力的な人物も珍しい。若い頃の家康はまことに颯爽とした青年武将であった。かれが「たぬき親父」のイメージで語られるようになったのは何故か…。ここらあたりにも歴史の面白さが転がっているようである。

特集 私の好きな歴史上の人物

最近の会報は史跡探訪の記事ばかりでつまらないという声が寄せられました。そこで今号は「人物」に焦点をあてて特集を組んでみました。会長を含めて何人かの会員に、歴史上の好きな人物、気になる人物について書いてくださいと依頼したのです。磐座亭が予想したのとはまったく違った原稿が集まりましたが（もっと有名な人物について書かれると思っていました）、特集の趣旨にはばっちり合っていると思います。お楽しみください。

日野富子は「悪女」か

出内　博都

歴史上の好きな人物についてという表題で、依頼をうけたが、どうもこの年齢では歴史上の人物にロマンを感ずるほどの情熱もなく……。

ところが、新世紀の政変とでも言うのか、大方の予想を裏切って小泉内閣が出現し、五人の女性大臣が誕生した。これはまさに日本政治史の上で未曾有のことである。男女共同参画社会を目指す二十一世紀の現在日本社会の当然の流れである。この流れの中で歴史の中で脚光を浴びた女性に焦点を当ててみようと思った。

史実・伝承とりまぜて天照大神・倭王卑弥呼・神功皇后・推古・皇極（斉明）・持統等の諸女帝……下っては尼将軍政子や日野富子等々、政治の表舞台にたった女性は多いが、これらに共通する歴史的事象は多くの場合男性政治の行きづまり（政争・紊乱・乱行…）さらには時代の進展に対応しえない男社会のしがらみと保守性がある中で、女性支配者がたつことによって、直接的間接的に打開していった歴史である。

これらの女性のなかでそのものずばり「悪女」と呼ばれたのが日野富子である。果たして彼女は悪女だったのだろうか……。

富子は永享十二年（一四四〇）吏僚貴族日野政光の子として誕生、十六歳で八代将軍義政に嫁す（一四五五）。三代将軍義満のころから日野家から将軍正室がでる習わしになっていた。二十歳の義政には既に多くの妻妾がおり、大叔母重子（四一歳）が将軍生母として権勢を振るっていた。無菌培養のように育てられた富姫には想像もつかない世界であったであろう。ことに今参局（お今）という義政の乳母兼側室と伝える年上の女性が最大の敵であった。姑重子（富子方）対お今の女の闘い（嫡子誕生による権勢の確保）。その間三年、富子が生んだ男子は数時間の生命を保ったにすぎなかった。この悲劇がお今の呪詛によるものだという風評のなかに、お今勢力は御所から駆逐された（琵琶湖沖の島配流途中自決）。この女の闘いは、富子の策略というよりも、姑重子によってしくまれたものであろうが、後世富子悪女論の一つにあげられている。

陰湿な後宮の女の闘いをしのいで、妻の座を確保したとはいえ、時代はまさに大変な時であった。災害と土一揆と徳政の混乱があいついで起こった。ことに寛正の大飢饉（二年＝一四六一）では、京都だけでも二ヶ月に八万二千余の餓死者があり、死骸が加茂川の流れをせきとめ、無縁墓は野に満ちる有様であった。この混乱のなかに富子の運命をかえる出来事があった。寛正五年（一四六四）義政は弟義視を還俗させ、養子として跡継ぎにし、後見者に管領細川勝元を決めた。時に富子は二五歳、女性として一段と充実し、御台所としての安定した生活を願う日々であった……。嫁して十年、姑と数多の側室のはざまで女の闘いに明け暮れ、夫の奢侈・逸楽に耐え、待ち望む男児にはめぐまれず、もしこんご男児出生の場合は僧籍に入れるという義視との確約……。富子の心情、察するにあまりあると言えよう（この間他の側室二名が男児を出生するという皮肉な事実もあった）。

しかしこの時、歴史の駒は大きく動いた……。翌寛正六年十一月二十日、花の御所で義視の元服式がおごそかに行なわれたが、その三日後に富子は執念の男児の誕生を迎えた。当時の慣例によって男児は乳母に抱かれて執事伊勢貞親邸に移された。一時は身の不遇をかこった富子と権勢欲の権化として「押の大臣（おとど）」と異名をとる兄の日野勝光は義視・細川勝元に対抗するため、守護大名として隠然たる勢力をもつ「赤

入道」の山名宗全のもとへ走った。腹に一物もつ山名は男児（義尚）の保護を快諾した。こうして守護大名の政権争い、管領畠山・斯波両家の家督争い、国人階層の自立運動とからんで、大乱への機運は一気に醸成され、応仁元年（一四六七）大乱が始まり、十一年にわたって戦乱が続き、王城の地京都は焦土と化した。

権力・家督をめぐる謀略、集合離反、手段をえらばぬ破壊略奪、東西二十五万の武士が京都を舞台に展開する戦乱の波に翻ろうされる幕府。義政は全く政治への関心を失い、東軍の象徴であった義視はいつしか西軍山名の陣営に走り、富子＝義尚は皮肉にも細川勝元と同盟するという異変がおきた。相国寺合戦後の焼け野の中の孤島のような御所で、三歳の義尚の形ばかりの髪置きの儀式を見た富子……。義尚こそは名実共に天下に誇り得る将軍に育てたい……。二十人近い妻妾を抱え、毎日酒浸りの夫を見るたびにこの思いは一入であっただろう。

文明五年（一四七三）宗全（三月）、勝元（五月）相次いで没し、十二月義尚将軍宣下（九歳）。富子の宿願成り、将軍後見役として、蓄財に努める熟女富子（三四歳）の政界生活がはじまるのである。文明九年（一四七七）大内政弘の仲介で義政と義視の和解が成立し、義視は美濃の土岐氏のもとに身をよせ、西軍の闘将畠山義就は失意のうちにも、富子から千貫の借用をうけて河内に下って行き、二つの難問がかたづいた。

北山に金閣をつくり、国王として権勢をふるった義満の情熱をもたない義政は政治の世界から孤立し、夫婦の間もしだいにつめたくなっていった。室町第に妻子を残して小河の新邸、さらに長谷聖護院の山荘へとのがれ、天皇の帰宅の要請にもこたえず、ついに東山山荘造営のとりこになり、将軍後見職（大御所）は必然的に富子の肩にかかってきた。

焦土と混乱のなか、公家たちの困窮生活・殿舎の再建・内裏の修築・諸施設の復旧・東山山荘の造営資金……。富子の政治行動の第一目標は財貨を蓄えることであった。京都の七口に関所をもうける（一揆の強訴によって廃止）、酒屋・土倉を使っての貨幣の融通（俗に高利貸といわれている）、倉奉行をつかっての米相場、遣明船による銅銭輸入あらゆる手段で蓄財に努めた。しかしこの銭は殿舎・内裏の復旧、諸儀礼・式の復活、公家の救済などに費やされた。老学者一条兼良による『樵談治要』はじめ多くの著述講義など、行事伝統の復活にも努めている。

焦土と混乱のなかで畜銭に身をやつす。この現象のみ見ると如何にも悪女であろう。しかし彼女を除いて誰がこの難局に処す資金を、しかも流通経済のすさまじい発展の中で銭を集め効率よく使いえただろうか。多くの歴史的しがらみの中で、閉塞状態にある男性にはなし得ないことではなかったことではなかろう……。

富子の求めた将軍像、夫義政を反面教師として、強い意志とあふれる情熱にもえた青年将軍義尚の姿であったが、しかし義尚は女性問題、諸大名との不和、酒と女、父義政との対立、マザコンからの自立の悩み、二回にわたる髻切り事件。結局奉行衆と奉公衆の対立から延徳元年（一四八九）三月近江鉤の里の幕営に、夢を託したわが子の短い生涯（二五歳）を見取らなくてはならなかった。ときに富子五十歳であった。

夢を託した義尚は強い将軍になり得ないまま逝った。愛息への涙も乾かぬ翌年正月、完成なった銀閣の庭をながめながら義政がまた忽然と逝った。将軍に義視の子義材をたてざるをえなかった、あのいまわしい義視との対決が現実のものとなった。義尚の後見者としての権力の座を守り、緒についたばかりの復興をここで放棄することはできない。じっくり時期を待とう……。しかし長い間、不遇をかこった義視の猜疑心はついに富子の邸をこわし、所領まで没収した。さらに畠山両家（政長・基家）の争い、畠山対細川政元、陰惨な男の戦いは確実に進行していた。

こうした中で、翌延徳三年正月七日、突然、大御所義視が五三歳の生涯を終えた。後ろ盾を失った義材は、執権畠山政長と細川政元のどす黒い陰謀の中で、近江の六角征伐、河内の畠山の内紛戦へとかりだされ、やがてさまよえる将軍として山口へ落ちのびていった。この間、富子は細川政元と組んで、十一代将軍義澄擁立に夢を託した。想像もつかないような戦国への歴史の変転の中で、むしろ滅び行くものの側に立って幕府・将軍という秩序を守るために最後の力を奮い起こしたと言えよう。新しい時代への生みの悩みとしての戦国の入り口、明応五年（一四九六）富子は五七歳の生涯を終えた。

おびただしいその財産は、富子がその地位につけた若輩将軍義澄の手に転がり込んだ。が、義澄は富子の葬儀には参列しなかった。まさに新しい時代を生み出す母として、男性政治では果たし得ない女将軍の宿命に生きた生涯であったといえよう。

女子大学をつくった備後の人々

―京都女子大学・武蔵野女子大学・大妻女子大学を例として―

堤　勝義

一、はじめに

備後地方には、京都女子大学の前身をつくった神辺町出身の甲斐（足利）和里子、武蔵野女子大学をつくった三原市出身の高楠順次郎（澤井恂）、大妻女子大学をつくった世羅の三川出身の大妻（熊田）コタカがいる。備後地方には、早くから女子教育に尽くす素地があったのであろうか。この三人の人々を取り上げてみたいと思う。

二、甲斐（足利）和里子

京都女子大学の前身をつくり、一生を女子教育に尽くした甲斐（足利）和里子は、明治元年（一八六八）に神辺町の勝願寺に、本願寺派の勧学として知られていた足利義山の五女として生まれている。

現在の同志社女子大学を出た和里子は、早くに女子教育を志して、まず京都の下京区に、松田甚左衛門と共に顕道女学院を明治三二年（一八九九）四月十一日に開校している。

この女学校では、仏教的情操教育を重視した人間形成を努めていたのであるが、明治三四年（一九〇一）二月、わずか二年程で廃校となっている。共同経営者の松田甚左衛門との意見の相違があったものと考えられる。

和里子は、顕道女学校時代に、夫の甲斐駒蔵と一緒に文中園という私塾を開いていた。文中園は、生徒の急増によって、文中女学校と改名している。それに対して本願寺は、月額五円の助成金を出資している。

その後、文中女学校は発展をし、明治四三年（一九一〇）二月に私立京都高等女学校を買い取ることになった。文中女学校は京都高等女学校と合併し、同年三月に第一回卒業式が行われている。

この時、西本願寺も女子教育に注目していたので、本願寺仏教婦人会連合本部は、甲斐夫妻からこの女学校を譲り受けるように交渉し、その事業として運営されることになった。これが、京都女子大学の前身となる京都高等女学校である。

西本願寺で、この高等女学校の援助者となったのが、大谷探検隊を中央アジアに派遣して、わが国のシルクロード研究の端緒を開いた大谷光瑞であり、妹の九條武子であった。

当時の女子教育を振り返ってみると、跡見女学校や実践女学校（跡見女子大学・実践女子大学の前身）が明治八年（一八七五）、明治十九年（一八八六）に広島英和女学校（広島女学院の前身）、明治三二年（一八九九）に鳩山春子の共立女子職業学校（共立女子大学の前身）、明治三三年（一九〇〇）に津田梅子の女子英学塾（津田塾大学の前身）や吉岡弥生の東京女医学校（東京女子医大の前身）が開設されている。

これらの学校は私塾の前身があるけれども、甲斐和里子も、前述の学校に遅れることなく、明治三二年に顕道女学校を開設しているので、本来は、女子教育史の中にも名をとどめるべきなのであるが、早くに京都高等女学校を手放したために、その名があまり知られていないのは残念なことである。しかし、経営権が西本願寺にかわっても、和里子は京都高等女学校に長くとどまり、女子教育に専念したのである。

『京都女子学園八十年史』の第一章の歴代学園代表像の一番最初に、甲斐和里子の事歴と顔写真が掲載されていて、二番目には夫の甲斐駒蔵の事歴が掲載されている。これによっても、和里子が京都女子大学の創立者として認知されているのがわかるのである。

三、高楠順次郎

武蔵野女子大学の前身をつくった高楠順次郎は、御調郡八幡村（現在の三原市八幡町）の澤井家の長男として生まれている。生没年は慶応二年～昭和二十年（一八六六～一八四五）である。

高楠順次郎は養子に入ってからの名前で、元は、澤井恂といった。その弟が戦前に備後の歴史界で知られていた澤井常四郎である。澤井常四郎の著書は、現在も福山の古本屋で売られている。

現在の三原市立図書館の始めは、澤井家の蔵書の寄贈によって出来たのである。高楠博士の生家前には、三原市史跡として高楠文庫（澤井図書館）の掲示板が立っている。三原市立図書館に所蔵されている貴重な蔵書は、澤井家のものであったのである。

澤井恂は、京都の普通教校（龍谷大学の前身）在学中に、神戸の高楠家の養子になったのであるが、長男が養子にいくというので、名前を順次郎と改名しているのである。

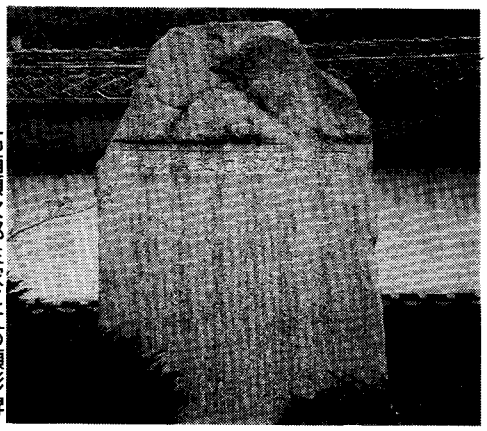
明治二二年（一八八九）に普通教校を卒業して、英国のオックスフォード大学に留学した。オックスフォードでは、マックス・ミュラー

教授の指導を受けて、サンスクリット学を勉強している。

澤井や後に朝日新聞の論説委員になる長谷川如是閑等が、普通教校時代につくった雑誌を『反省会雑誌』といったが、これが東京に移って『中央公論』になっている。

高楠は、日本人で初めて、正式にサンスクリット学を学んで帰国した。帰国後、東京帝国大学講師となって、サンスクリット学を講義し、後に教授になっている。『大正新修大蔵経』や『南伝大蔵経』の刊行等、多くの編著書がある。

高楠は女子教育にも力を尽くしている。大正十三年（一九二四）三月七日に東京築地の本願寺別院の焼け跡に武蔵野学園を創立している。


高楠順次郎生家に立つ顕彰碑

高楠博士は、十年間に長女、次女、三女、四女と相次いでなくしているが、同大正十三年に保谷村（現東京都保谷市）に広大な土地を確保して、大学昇格運動をしている。これが武蔵野女子大学の前身である。

武蔵野学園には桜並木があり、芦品郡新市町の某植木屋が毎年手入れをしていたという。高楠博士との個人的なつながりがあったのであろう。

高楠博士は、昭和十九年（一九四四）四月二九日に、第四回文化勲章を受章しているが、翌昭和二十年（一九四五）六月二八日に死去している。戦時中のことであったので簡素な葬儀であった。

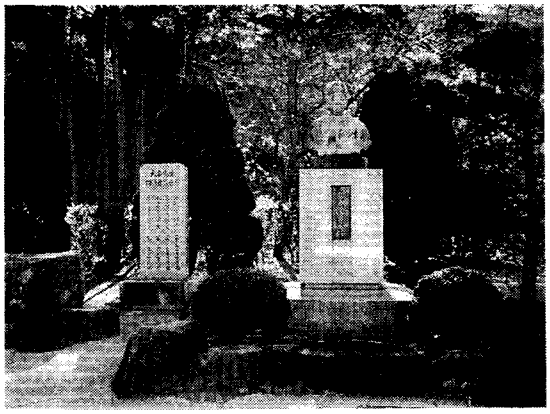
現在、生家前には、高楠博士を称えた大きな石碑が建っている。同じ文化勲章受章者の仏教学者宇井博士の文章である。

武蔵野学園は、その後、昭和二五年（一九五〇）に短期大学になり、昭和四十年（一九六五）に大学に昇格している。高楠博士の蒔いた種が大きく実をつけたのである。

四、大妻（熊田）コタカ

熊田コタカは、世羅郡三川村久恵に生まれている。明治十四年（一八八四）の生年である。

現在生家跡は、三川ダムが出来たことにより湖底である。


生家跡のダム湖をみる大妻コタカの胸像

熊田コタカは、明治三三年（一八九九）に裁縫講習所に入学し、翌年卒業している。明治三六年（一九〇三）に、東京私立和洋裁縫専門女学院和服速成科に入学して、翌年七月に卒業している。そして、コタカは、明治四十年（一九〇七）に、鎌倉尋常高等小学校訓導となり、同じ年に、大妻良馬と結婚し、大妻コタカとなっている。

昭和四三年（一九一〇）、私塾を東京技芸教授所と命名している。大正三年（一九一四）には、大妻技芸伝習所と改名。さらに、昭和四年（一九二九に大妻学院、昭和十七年（一九四二）に大妻女子専門学校と改名し、女子教育に邁進している。

女性教育開拓者としては、自由学園をつくった羽仁もと子や、東京女子医大の吉岡弥生に次いで、大妻コタカの名前も出てくる。女子教育の開拓者であった。

現在、三川ダムの近くに、裁縫学校が再現されて、コタカの胸像が、ダムによって出来た湖を向いて建立されている。

五、まとめ

備後地方の人々の中で、女子教育に尽くして、京都女子大学、武蔵野女子大学、大妻女子大学の前身をつくった、甲斐（足利）和里子、高楠順次郎、大妻（熊田）コタカについて、簡略に書いてみた。

高楠順次郎を除いて、甲斐和里子、大妻コタカともに、早くから女子教育に尽くして、それぞれが興した学校が女子大学として成長し、わが国の女子教育に貢献しているのである。

《参考資料》

『京都女子学園八十年史』
（平成二年十二月五日刊）
『武蔵野女子学院五十年史』
（昭和四九年十一月十一日刊）
『大妻学院八十年史』
（平成元年十月二日刊）

風に吹かれた花は
―西行と包彝―

石井　良枝

仙台の地を離れて旅人の心情のまま福山の地へ帰省したその時、備陽史探訪の会員になりました。それから歳月は巡りめぐりました。

今年の六月、一年ぶりに仙台のわが家で四日間を過ごしました。二十坪に満たない庭には、不似合いな前栽の伽羅・ドウダンつつじ・黄楊・藤棚・紫陽花の木々が、宿主顔に雨に濡れていました。私の記憶の中では、仙台といえばしだれ桜と白い仙台萩が鮮明に浮かびます。そして庭々の木々はそれぞれに由緒正しきものと言われます。

武家屋敷の面影を残す近所の屋敷に、一本のしだれ桜があります。花時を過ぎて青葉がしだれ、幹は年輪を刻んで黒く雨に光っていました。いつもの通り仙台へ着くと私は、玄関を出て市街地まで同じ路を黙って一人で歩きます。

ここ数年わが家の周辺には、マンションやアパートが建ち、馴染みの八百屋や魚屋、老舗の和菓子屋が閉店したり移転しています。市街地の様相も変貌を遂げており、私の心の中の仙台の町並みはセピア色の写真の一葉になっていくようです。

その年の四月九日、私は見慣れたしだれ桜の花見は、今日が最後と覚悟して歩きはじめました。前を行く後ろ姿を少し離れて眺めながら、勾当台公園で少し休み仙台駅まで歩き続けました。

平成元年十一月十三日（月）から週に一度福山から東京を経て仙台までの私のみちのく行脚が六ヶ月続きました。

私は「どうぞ富士山の勇姿が眺められますように」と祈る気持ちで乗車します。この日の富士山は頂上が雲の上に白く見えました。

仙台に着くと、既に手術は終わっていました。病室には桜の花枝を挿して花見を続けました。紫陽花の花が雨に濡れながら咲いた日、花見の主は帰天し奇跡は起きませんでした。丹羽の片隅に一本の仙台しだれ桜を植えました。花見の主なき庭で枝を繁らすことは無理なことだと、枝を切り落としました。

いつからか桜の花が私の心に住みつき好きというのとも違い、ただ心から離れない風の中の花枝となりました。

福山駅に降り立った時「空気がおいしい」と感じ、西の山並みに沈む真っ赤な夕日をまぶしく眺めながら、わが家へと帰り着くのです。私は垣根の外に一本の八重桜を植えました。私と一緒に年を重ねています。

☆

鳥羽院の北面の若武者であった佐藤兵衛義清が出家し、西行となったのは、保延六年（一一四〇）二十三歳の時である。西行は三十歳と六十九歳の折と二度のみちのく旅行をしている。文治二年（一一八六）には伊勢から旅立ち、途中鎌倉で将軍源頼朝と会っている。

▽聞きもせずたばしね山の桜花吉野のほかにかかるべしとは

▽風になびく富士の煙の空に消えていく方も知らぬわが思ひかな

▽年たけてまた越ゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山

▽願はくは花のしたにて春死なむそのきさらぎの望月のころ

西行はかねての願いがかなって、建久元年（一一九〇）二月十六日、満月の冴えた夜明け近いころ、歌のとおり河内国南葛城の弘川寺で往生を遂げている。西行は自分の寿命の限りがあることを分かったところで「自歌合」の成就を願っていたと私にも思える。

内宮奉納
「御裳濯河歌合」（藤原俊成判詞）
外宮奉納
「宮河歌合」（藤原定家判詞）
「千載和歌集」（十八首入選）
「新古今和歌集」（九十四首入選）

これらは西行の歌を載せている代表的な歌集である。西行には桜の歌が多い。二千首の歌の中で二百三十首もが桜の歌である。

夏に訪れた毛越寺、衣川・東稲山金色堂・能舞台・高舘・義経堂と巡り歩いた。桜の季節にもう一度西行の旅枕を訪れてみようか。松永の日本玩具（人形）博物館に「富士見西行」――西へ向かって後ろ姿で去る――背中に笠を背負った小さな石像が片隅に置いてあった。

今度は前を向けて対面しよう。いつの日か崇徳院白峰御陵に参拝し、白峰寺境内の西行像に出会い、吉野水分神社のもの静中境内に立ち、願わくは西行像と出会いたいと私は思い始めている。

☆

平成十二年四月十六日、幕末時代の郷土の歌人出原包彝の歌碑を加茂川の辺り賀茂神社の池畔に大鳥居に向かって造立した。故石井吉馬宮司の遺志を継ぎ、二十年忌と生誕百年の記念行事として一四六人の賛同者からの寄進を得て除幕式典を斎行出来たのである。

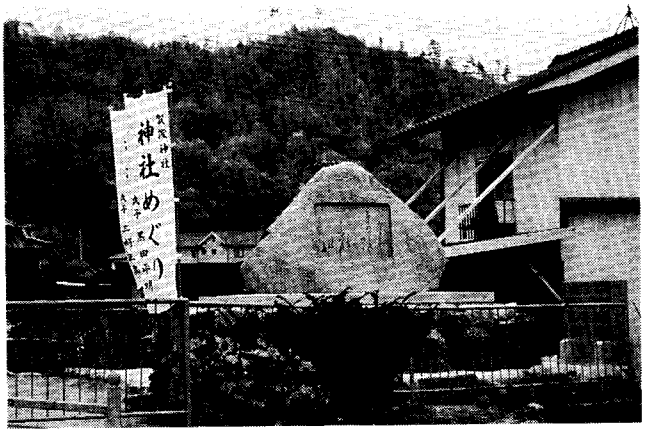
碑は地元の山から運び出した幅約

二m五〇cm、高さ約一m七〇cm、重量約四tの花崗岩の自然石で、

「みたらしやかけて祈りしかひありてけふ立ちかへる加茂の川波」

の歌を刻んだ。

安那郡芦原村の庄屋を務めていた包彝が、天保五年（一六三四）三十八歳の時、天領だった芦原村の年貢米を福山沖から海路江戸間で運び、陸路を帰った百余日の道中で綴った歌日記『海路藻屑』の中から採り、肉筆を忠実に再現したものである。



出原包彝歌碑

☆

『海路藻屑』によると、出原包彝はおおよそ次のような旅程をとっている。

「如月の頃思い立って弥生二十日に旅立ち、二十二日に出立、二十八日に本船に乗る。卯月二十五日大神宮に詣る。皐月二十五日、年貢米を納める。水無月十五日江戸出立、二十七日下鴨の宮に詣る。文月九日産神加茂の宮に詣る」

包彝は道中、実に多くの歌を詠んでいる。

▼立つまではちらすもあれな古郷は花のさかりを面影にせむ

▼さきみたまさきはひ給へ行かへるほとは千里の海路くにはら

▼末遠くみるめはれたる朝なきにともの浦わをいつる百船

▼いさをしを菊の下水今も世にふかき匂ひはあせてのこれり

▽ぬれてほすおきのかもめの毛衣にまたうちかへる玉の浦なみ

▽なにごとのおはしますとはしらねともかたじけなさに泪こぼるる

（以上二首西行）

▼たれかまたあふかざらめや久かたの天照神のとこ宮ところ

▼ほととぎす内外の神の瑞垣に声もへだてず鳴きわたる也

▼わたつみの波よりつつく雲のうへにまかはてむかふ不二の大嶽

▼横雲の空にかわれてほのほのとふしの峯しらむ波の曙

▼千さとへし船路ははててわけ見んもまたかぎりなき武蔵野の原

▼四方の国君になひきてをさまれるみよのみつきは時ぞともなし

▼をさまれる御世には何のあたやもる大城のもとはたみぞにぎはふ

▼隅田川すむてふ鳥の名にしほふ都のかたにあすはたちなん

▼あはれ世にきえぬその名をおもふにもまつ袖しぼる森の下露

▼今も尚千世の名にふる鶴か岡神のめくみのくちぬかしこさ

▼またきより秋や川瀬にうかふらむなかれ涼しきかものみたらし

▼棚機の逢瀬をやおもふ霄々にまつも枕のかはる契は

▼武士のあた守りけん名をとめて趾はむかしにさるかけの山

▼ふる郷にいそかれにしは花薄ほにいでてまねくけにやありけむ

☆

早春の三月初旬、雪の残る広島空港を旅立ち、雪を頂く富士山を遙かに眼下に眺めて羽田に降り立ちました。「皇居勤労奉仕団」の一員として参加することになったのです。帽子から上着、靴まで白一色に身を固め、「広島県青年神職会」の薄紫色の襷をかけ、面映ゆさと誇らしさを胸に、四日間の奉仕活動を無事終えることができました。

日々、日本の国と国民のため、ひいては世界の平和を祈念される天皇陛下のお姿が、如実に私のみに迫って参りました。間近に天皇陛下・皇后陛下の御会釈を賜り、緊張と感激でいっぱいになりました。

最終日には、赤坂御苑で奉仕を終え、東宮御所の御車寄前庭での皇太子殿下・妃殿下の御会釈を頂き、梶山会長に合わせて万歳三唱を声高く唱和し終えた時には、私の心に芯――神職としての自分がここに立っていること――が通ったことを体得いたしました。振り返ってみると、私は十年間に出会った人々に励まされ、手助けを頂きながら研修を重ねて参りました。

現代の日本国の自然の宝庫である皇居の自然――木々の梢が、池が、土が、吹く風が生きとし生けるものの生命を育む源泉として、永く存在し続けるために、「皇居勤労奉仕団」の活動が有意義なことだと実感いたしました。

皇居の御苑に咲いた花々が、木々の根元に淡く濃く青葉の風に吹かれて散り敷いたことでしょう。

葉月四日望月の日記す

三相撲取りの碑

小林　定市

福山市は、市制施行八五周年を記念して、大相撲福山場所を本年十月二〇・二一の両日、ローズアリーナにおいて開催出来るように準備を進められているようである。

日本には相撲の神話伝説が伝えられているが、神話は事実ではないらしく、古代から農民の祭りの神事として発展しており、政権が公家から武家に移ると、武士が戦場における組討ちの実践的武術として将軍上覧相撲を毎年盛大に催している。

江戸時代後期になると、寛政三年（一七九一）に開かれた勧進相撲に、将軍徳川家斉の初めての上覧相撲で相撲熱はいよいよ高まり「寛政黄金時代」を出現させた。福山地方でも当時以降に活躍した郷土力士の石碑が残されているが、次第に郷土の人達から忘れ去られようとしている。

水呑町の水呑小学校南の旧福山鞆県道辻脇に自然石の供養塔がある。

棹石に

「南無妙法蓮華経　覺遊勢日助信士

外ヶ浦粂右衛門」

とあり、台石に世話方の名前と安政五年正月の刻字が見られる。総高は約二三五㎝、棹高一八五㎝。

外ヶ浦粂右衛門の怪力伝説は面白く伝えられているが、粂右衛門から数えて五代目の杉原悦太郎さんの家には、福山藩主阿部伊勢守正倫（まさとも）から拝領した羽織袴や刀が現存することから、阿部家御抱えの力士（士分扱い）だったものと推定される。

外ヶ浦関は、寛政二年（一七九〇）五月に大阪相撲の二段目から前頭二十九枚目に昇進し、寛政九年八月迄関取として活躍している。

最高位は寛政七年八月の西方前頭十枚目であった。同年の大阪番付には横綱はおらず、西方の大関は不出世の強力雷電為右衛門で以下関脇と小結が各々一名であった。

神辺町の上御領御野小学校北約三〇〇ｍ、八丈岩登山口四ッ分辻にも自然石の石碑が見られる。

「外ヶ島弥五郎　寛政九年（一七九七）巳七月九日　行年廿四寂　近村助力當村施主　安政四（一八五七）丁巳二月十一日　追善角行　一行上建　世話方若連中　勧進元清吉　差添人谷五郎」

と刻まれ、総高は約二二〇㎝、棹一六七㎝。

外ヶ島弥五郎にも、外ヶ浦と同様に怪力伝承が伝えられている。

外ヶ島（藤井氏）が何時から外ヶ浦に弟子入りしたかを明らかにする史料は見当たらないが、外ヶ島が死亡した寛政九年の大阪番付を見ると、外ヶ浦は番付から消えており、二人が何らかの事件に巻き込まれたのか、それとも弟子を失った悲しさから帰郷したのか判然としない。

また、木之庄町の城北中学校の裏墓地にも移された角柱墓塔があり、

「玄覚頭園信士　外ヶ浦門人　外ヶ浦治兵衛　三村氏性　行年四十三才　寛政元年（一七八九）六月上一日性　天保二（一八三一）辛卯九月上三日没」

と刻まれ、総高は約一八〇㎝で、上質の御影石が用いられている。

三村氏を性（しょう）としていた外ヶ浦治兵衛は、師の四股（しこ）名を襲名したものとて考えられるが、別に己之助を名乗り最初の力士名は廿山（はたらやま）であった。

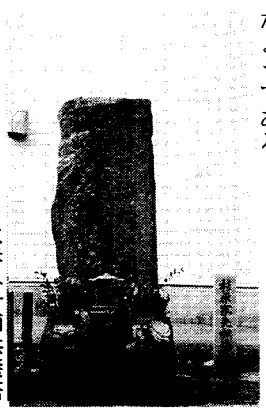
外ヶ浦治兵衛は深津郡川口村の三村一族の出身で、外ヶ浦治兵衛の姪タメの嫡男三村日修は、日蓮宗総本山身延山久遠寺の第七五世を勤めた。

外ヶ浦治兵衛が天保二年に死没するとその遺骸は、川口村の福山港入江の浚渫土砂捨て場に埋葬され後に墓が建てられると、その新涯地は何時しか廿山新涯と呼ばれるようになった。福山市の発展に伴い、廿山新涯も都市化が進み区画整理が進められると廿山の墓は無用の長物となり、先年何の関係も無い木之庄町の墓地に改葬された。

相撲番付から外ヶ島の活躍を明らかにする史料は見当たらないが、没後六十年経過した安政四年に、土地の若者が中心となって大阪から力士を呼び、盛大な追善供養相撲を営み碑を建立した。

外ヶ浦の墓は、水呑妙顕寺の墓地に建てられていたが、弟子外ヶ島の建碑運動を聞いてか、追善相撲の翌年に供養塔は建立された。当時の村人達は大阪で活躍した関取を村の名誉として尊敬し、人通りの最も多い場所に碑を建立して人生の手本としたようである。

外ヶ島石碑



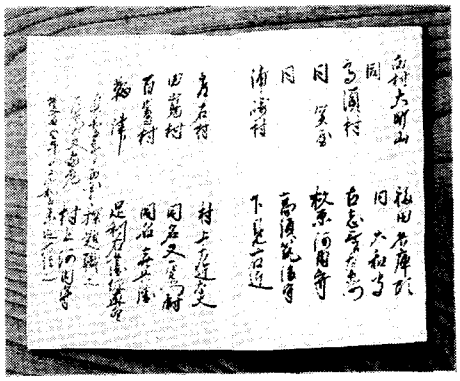
水呑外ヶ浦供養塔

『備後福山領古城記』二

城郭研究部会

［註］

沼隈郡
西村大町山　福田兵庫頭　①
同　大和守　②
高須村　古志三良左衛門　③
同　関屋　杉原河内守　④
同　高須筑後守　⑤
浦崎村　下見右近　⑥
常石村　村上左近大夫　⑦
田嶋村　同名又左衛門尉　⑧
百嶋村　同名喜兵衛　⑨
鞆津　足利右兵衛佐直冬　⑩
貞和五年より西国之探題職也
村上河内守　⑪
左衛門大夫家老　⑫
慶長五年より元和五年迄居住也
同年牢人ス
草深村　三浦庄司末流　⑬
岡崎平大夫正実
上山南村
丸山城　桑田式部大輔　⑭
同　同名備前守　⑮
同　中
石浦城　同名修理太夫　⑯
同　同名伊賀守　⑰
同　下
矢クリ城　工藤祐経末流
工藤和泉守　⑱
郷ノ城　田中河内守　⑲



備後福山領古城記

［註］

①兵庫頭長興。福田大和守盛国二男、天正年間没落し、子仁左衛門義国能登原に移住すという（『沼隈郡誌』）。

②大和守盛長。大和守盛国嫡男、古志清左衛門家老、能登原正瑞寺建立（一本古城記）。

③三郎左衛門景勝。本郷大場山城主古志豊長と同族、毛利元就に属し、天文三年（一五三二）品治郡亀寿山城落城の時城番として入る（『沼隈郡誌』）。

④高須河内守元可（元士）。本姓杉原氏、高須元盛二男、兄元胤後嗣なきゆえ本家を継ぐ（「萩藩諸家系譜」）。

⑤筑後守元兼。河内守元可嫡男、毛利輝元に従い長州萩へ移る（「萩藩諸家系譜」）。

⑥（左近トモ）将監行経。応永の始め頃父太郎行治、足利家より賞せられ肥前松浦より移るという。本姓松浦氏（『沼隈郡誌』）。

⑦左近大夫範和。能島村上範重二男、弘治元年（一五五五）厳島合戦、永禄四年（一五六一）門司合戦等に功あり（『沼隈郡誌』）。

⑧又左衛門就常。村上河内守範定の子、天文九年（一五四〇）安芸吉田合戦の時尼子方の将三沢藏人介を討取る。永禄十二年（一五六九）周防布部城合戦の時討死（『沼隈郡誌』）。

⑨喜兵衛義高。茶臼山城主、永正年中（一五〇四～二一）因島河野友三郎に攻められ討死、子高吉相続す（『福山志料』）。

⑩貞和五年（一三四九）中国探題として大可島城に拠るが、杉原又四郎に攻められ肥後へ逃れる（『太平記』）。

⑪河内守範定。能島村上範重の嫡男、鞆城代（『沼隈郡誌』）。

⑫福島正則家老大崎玄蕃、鞆城修築す（『沼隈郡誌』）。

⑬三浦党岡崎義実より出る。正実の孫忠実兄弟、建武三年（一三三六）多々良浜合戦の功により岩成庄を賜るという（『沼隈郡誌』）。

⑭式部大輔将能。丹波国桑田郡何鹿郡を領して桑田氏を称すが、天文元年（一五三二）波多野氏に敗れ西国に流浪す。天文五年（一五三六）沼隈郡山南村森脇城主箱田氏を急襲して追落し、何鹿城と改め居住すという（『沼隈郡誌』）。

⑮備前守信房。桑田将能の弟、天文八年（一五三九）長州より山南村に移り丸山城を築くという（『沼隈郡誌』）。

⑯修理太夫義長。源頼朝の男大友左近将監能直十一代の孫、子将能は何鹿城主という（『芸備古蹟志』）。

⑰『沼隈郡誌』は、石浦城主として、桑原重信―重久―重義三代を載せる。

⑱和泉守一国。大永二年（一五二二）父伊勢入道一益芸州より移り、八栗城（岩淵城）を築く。一国は天文年間藤江中組城へ移る（『沼隈郡誌』）。

⑲河内守政胤。毛利家臣、播州三木にて討死（『福山志料』）。

ドイツちょっぴり滞在報告

野田　恭造

ドイツ、ミュンヘンで国際結婚して二児を抱えている次女のところへ、妻と二人二週間の予定で行ってきました。目的は娘たちが最近購入した新しい（中古の）建物を見るためと、もちろん二人の孫の成長ぶりの確認です。費用を考えて、いつもの先方の呼び寄せキップでエコノミー。ちょうどゴールデンウイークの高価な時ですので、休暇を増やし、前後にずらして四月二五日から五月八日としました。

土産は海苔・削り節・わさび・蕎麦つゆ・餅・酒のつまみ・酒等々限度一杯満載していきましたが、そこまで　持って来るとはと娘にいわれ、親の過分な思い入れを痛感しました。飛行機は、エコノミー席といっても段々改善されている模様で、エコノー症候群を心配することは全く感じない旅でした。この便は、ドゴール空港で乗り換えです。バスか徒歩で次の乗り換え口へ行きますが、簡単な方を選んで歩きましたが、その遠いこと。動く歩道を幾つも乗り継いで目的のD―63へ着きました。

喉が渇いても外貨を持ちあわせず、自動販売機を前にしても我慢の時間待ちです。ミュンヘン空港へは娘一家と婿の姉が出迎えてくれました。私達の滞在中の部屋は三階です（天窓付きの広い屋根裏）。

この家は五軒続きの集合住宅の真ん中で、トイレ三・バス二・地下室付きです。前後に庭があり、セントラルヒーティングで住宅地域である近辺は、全てこのスタイルです。

四月二六日　到着の翌朝、娘の歯の治療に散歩がてら同行しました。ゆったりした遊具の整った公園そばの歯科医院でビルの二階です。入り口の名札の横のボタンを押して内よりオートロックを解除して貰い入ります。娘の家も含め、オートロックが主流のようです。

四月二七日　上の孫と私達と三人でミュンヘン動物園へ行きました。バスと地下鉄を乗り継いで行きます。バス・地下鉄・市電は同一キップで、十六マルク（約八八〇円）です。動物園までは片道三マルク二十ペニッヒ（約一八〇円）。行き先の料金分を乗車時に駅または車両内の検札機で自分でパンチして改札の代わりをします。ですから改札はありませんが、時々抜き打ちの検札があります。私達のバスに途中から二人の婦人が乗ってきてチェックを始めました。時間・距離の不正があれば数倍の罰金を課せられるそうで、初めてチェックを受けました。動物園は水量豊富なイザール河の辺りにあり、園内も小川が流れる大きな公園です。

私達の入った入り口は、老婦人が一人でキップを売っていました。樹木が一杯の中に園舎が配置されていて、特有の臭気は感じません。動物は厚いガラス壁の向こうにいて、カバ舎ではどこにいるのかとのぞいていると、私の目の下一メートルのところで昼寝しているのには驚きました。ジャガーもあしかもペンギンも、ガラス越しに目の前にいます。ライオンは、たてがみのあるボスが二、三頭従えて高見で寝ころび、その下で子供達がじゃれています。象も四、五頭日向ぼっこしていて、一頭はタイヤを上手に転がして遊んでいます。よく見かける足を鎖でつないだような事も無く、他の動物もオープンに見せています。

園内にはところどころに小さな売店があり、老婦人が軽食・飲み物を売っています。孫は乗り物のところで止まってしまい、バイリンガルですのでチケット売場でチケットを買わせようとしますが、乗り場から動いてくれず、片言の私は大汗をかきました。

園内のレストランで昼の食事をしました。ケース内の料理を皿に取りトレーをレジに持って行き支払いしますが、これは他でも再三経験しました。

四月二八日　南の郊外にある十三世紀頃の古い教会を訪ねました。修道院のある大きな教会で、地ビール・地酒を醸造し、大きなレストランで有名です。バンド演奏もある賑やかさで、屋内は満員で外のテーブルで食事しました。

高原の丘に立つ教会は木々の緑、タンポポで黄一色の草地と絶好の景観で下方には湖が見えます。日本では、雑草が繁茂した放置した荒れ地の光景が多く見られますが、草も茂り放題という状態は見当たりません。教会への途中もすっきりした景色が続きますので、娘にいいますと日本と草木が伸びるスピードが違うといいます。しかし、環境に気配りし、自然を守るという努力には大きな差を感じます。

四月二九日　姉のイングリッドの誕生祝いに招待されました。

今日はミュンヘン中心部の有名なビヤホール「ホーフブロイハウス」のそばのレストランでの食事です。朝昼兼帯のブランチでバイキング形式の食事代は全て彼女の払いです。夕方は、オクトーバーフェストで有

名な会場で開かれているフェストへ婿、上の孫マックスと三人で行きました。大型の遊具・見せ物小屋・屋台などを楽しんで、ビヤホールの大テントに入りました。二千人近くも入る大きさです。

秋のオクトーバーフェストでは大テントが十も出るそうですが、そのすごさがしのばれます。バンドがヒットミュージックの演奏を始めると、足を踏み鳴らし、また椅子の上に立って肩を組んで大声で演奏と一体となる様は壮観です。もちろん、五歳の孫も一人前に声を張り上げています。

四月三十日　先方の御両親・婿・マックスとオーストリア国境のガルミッシュ・パルテンキルヘンへ行きました。ミュンヘンから一〇〇km南方で一九三六年冬季オリンピックの会場となった所です。マックスのスキーの腕前（？）を見せてくれるとのことです。

目的のツーグスピッツはドイツで最高の二九六四mの高さです。ロープウェーで頂上まで上がります。このロープウェー駅の正面に大きく日本語の案内看板があったのには驚きました。頂上の周囲は全て二〇〇〇m級の峯が雪で輝いていてサングラス無しではまぶしくてとても目が開けていられない状態です。頂上の展望台から別のロープウェーで谷へ少し降りて、そこがスキー場です。

ちょうど並んでいるオーストリア側のスキー場が前日閉鎖され、このスキー場も明日までなのでスキーヤーで混雑していました。帰りはレストランの地下からトンネルでアプト式電車へ乗り、駐車場の所まで帰りました。三つの乗り物で大人一人六三マルク（約三五マルク円）でした。

五月一日　今日はメーデーで、国の祭日です。午前中、四〇km南の両親宅のあるイニングの祭りに行きました。

町の広場にバイエルン地方の象徴のマークの付いた長いポールを立てていました。十数名で、大きな丸太の棒を、竹の先のロープで徐々に起こしていきます。大ジョッキのビールを飲みながら、これもバイエルン独特の羽根帽子・ヴェスト・皮ズボンの服装のバンド演奏を楽しみながら、時間をかけて立ててゆきます。

その後は隣の消防署の車両を全て外に出し、車庫も構内も使った大宴会です。男性が肉を焼き、ビールを注いでのサービスです。祭り参加記念の木製品を貰いました。

午後はローカルの飛行場が開放されているのへ行きました。小型機が数十機、混んでいる時は一分間に二、三機も離陸し、また次々に着陸します。乗客を滑走路の外まで乗せて来て、降りた乗客が機首を滑走路の方へ向きを変える手軽さです。場内や格納庫も開放していて、見物客が機体の側まで行けます。ほとんどが自家用機で、一人または二人乗りの簡単なのもあります。

私達は妻・婿・孫と遊覧飛行をしました。両親宅の上空や、幾つもある湖の上を飛んでもらいました。国境の山々が白く輝き、湖にはヨットが浮かび、整然とした農地が続く景色は抜群です。飛行料金は実質十分間で、大人四五マルク（約二五〇〇円）でした。

五月二日　早朝五時過ぎ念願のプラハへ向けて出発しました。アウトバーンはスピード制限はありませんが、私達の車は時速二〇〇kmで二五〇km離れた国境へ二時間程で到着です。ドイツの国境検問所は人がいません。

次のチェコの検問所で問題が生じました。孫達のパスポートに写真が貼ってない事を理由に入国拒否されたのです。最近報道されている幼児誘拐・売買が理由のようです。

やむなくドイツ側の鄙びたレストランで朝食をとり、パスポートを受けにミュンヘンへ引き返しました。旅券発給所で写真を撮り、証明してもらって再出発です。

国境の両替店でマルクとチェコのコルナと両替。（一コルナ＝約三・四円）チェコの田舎道を走り、ピルゼンを経て高速道に出、プラハへまっしぐら。途中サービスエリアに入りましたが、客は二、三名しかいません（交通量も少ない）。スナックを取りましたが安いこと。とり足・サラダ・ビールで一〇七コルナ（約三六四円）。私達が出るのと交替にバスの団体客がぞろぞろ降りてきました。

高速道を下りた所に旅行案内所があり、宿泊の紹介をしてもらいました。大人四人二泊一六〇マルク（約九〇〇〇円）。オーナーが迎えに来て案内してくれました。中心街より離れたペンションで裕福な人のアルバイトです。坂の上の新市街で、プラハ城が遥か向こうに見え、モルダウ河の向こうは旧市街です。

夕食は市中のレストランへ出るのも不案内なので、オーナーの紹介で近くの酒場へ行きました。既に満席で、しばらく外で待っていると席を空けてくれました。中は十分賑わっていて、東洋の来客は初めての様子で興味をもって話かけてきました。

しかし、婿のドイツ語を含めて全く通じません。

チェコは戦前ドイツに属していたのが、戦後ロシアに取って替わられ、今はロシア語の方が通じるようです。婿の両親や兄弟もチェコに住んでいて、戦後引き揚げさせられ、その時期、場所により西ドイツ・東ドイツ・オーストリアと別れて住まざるを得なかったそうです（現在も）。

私は止むを得ず、ピルゼンやミュンヘンのビールが旨いと誉めましたが通じません。ピルゼンはプルゼニというと後で知りました。

孫の名前を指さし教え、家系図まがいの図を書きながら私達の娘から孫への関係を示すと、大きくうなずいてビール等をおごってくれました。よそのテーブルからドイツ語の話せる人を連れて来て話したり、非常にうちとけて、帰る時に私に立派な魚の化石をプレゼントしてくれました。全食事代は五四二・九コルナ（約一八四六円、おごり返し分も含む）で庶民の店は安いです。

五月三日　宿舎で朝食。ハム・ソーセージ・コーヒー・紅茶・牛乳等部屋の外に置いてあります。早速プラハ城へ向けて車を走らせますが、プラハ城周辺はずっと石敷きの道路が平坦でなく、車へのショックが激しくて全く乗り心地が快適でありません。

宮殿は現在大統領官邸になっていて、衛兵が立っており、交代式・行進を含めてカメラのねらい所です。観光客がひしめいている王宮内やカテドラルのステンドグラスで有名な古い教会を見て歩きました。聖ビート大聖堂他、九〇〇年代や一四〇〇年代の見事なゴシック建築で見所一杯です。

チェコ訪問中のスペイン王子歓迎の野次馬の連れになったり、貴族の従者達の住まい後の黄金小路（カフカの仕事場跡もあります）で買い物をしました。今日は好天で、チェコは水質が良くないので、観光客は皆、飲料水のペットボトルを持っていてゴミ籠は空きボトルで一杯です。因みにスーパーで売っている一リットルの水のボトルが一五コルナ（五一円）、ビールの〇・五リットル瓶が七コルナ（約二四円）です。

三十聖人の像があるカレル橋や倉庫になっている火薬庫跡をまわってくたびれたので、地下鉄で、駐車している場所へ帰る事にしました。

電車が入ってきたので乗ろうとすると、四人の男が下の孫が乗っているバギー車の四隅を持ってさっと車内へ運んでくれ、娘一家や妻も後に続きました。

私もその後へ続こうとしますと、三人が向こう向きで肩を並べて、奥へ進むのを妨げます。電車が発車すると、三人は後退して私をドアへ押し付けました。すると、もう一人が左の方から私に手を出そうとします。私は大きな声を発しました。彼等はニヤッと笑って私より離れ、間もなく着いた次の駅でさっと降りて立ち去りました。プラハの掏摸（すり）に注意と聞いてはいましたが、我が身に及ぶとは思いも掛けぬ事でした。

地下鉄を出て駐車している所へ来ますと、前輪に大きな鍵が掛けられています。ちょうど空いていたのでこれ幸いと駐車したのが、その場所でのルール違反だったようです。さいわい側に警官がいて、キップを切られ罰金五〇〇コルナ（約一七〇〇円）。

五月四日　今日は午前中市内にある旧ユダヤ人街の見学に行きました。十三世紀にもユダヤ人の大迫害があり、彼等はそこに固まって囲いを作り固まって生活したそうで、殺されたり追い出された人々の立派な生活用具等が狭い建物群の内に陳列してあります。

小雨の中を多くの入場者が、ユダヤ独特の紙の丸帽子を頭にのせて、数々の遺跡をまわります。墓地が建物の横にあって、数百年前の立派な彫刻のある墓の中を巡るようになっています。次の予定は郊外にあるカールスタイン城の見学です。

高原の田舎道を延々と走って、やっと着いた所が案内所のような村落でした。城への道は一般の乗用車は乗り入れ出来ないので、八kmの山道を歩くか、バスかの方法があるとのことで、どちらも私達には時間の余裕がありません。しばらく迷っていると男が近づいて来て、八〇〇コルナの料金でマイクロバスで運んでやるといいます。返事を渋っていると、六〇〇コルナ（二〇四〇円）まで下げたので頼むことにしました（高い）。城で三〇分待ってくれるという約束で、慌ただしく一三四八年の歴史ある城内の砦や井戸を見学しました。帰りの途中、国境近くにはヴェトナムの商店が沢山あり、酒・タバコ・革製品・雑貨を売っています。店内に入ると店に不似合いな程店員が沢山いて、落ち着かず早々に退散しました。

国境検問は行きと違って、チェコ側は素通りドイツ側は入国を厳しくチェックします。私達の場合は、レンタカーだったので借りた契約書の提示を要求されました。持っていな

いと車両の押収もあるそうです。
プラハの美しい町並みと、いろいろな体験で忘れられない思い出となりました。

歴民研企画　鉄道記念きっぷの旅
近江八幡の史跡を歩く
―近江商人の故郷をたずねて―

爽秋十月、鉄道記念きっぷで湖東近江八幡の史跡を探訪します。豊臣秀次が築いた八幡城の城下町として有名ですが、近江商人の故郷としても知られ、多くの史跡があります。

《主な探訪予定地》

★近江八幡市歴史民俗資料館・郷土資料館・旧西川家住宅…ベンガラ格子の豪邸や土蔵が建ち並ぶ新町通りは町並みそのものが博物館。その一角にあり、近江商人の生活を再現している。隣接して郷土資料館、旧西川家住宅が建っており、いずれも見学する。

★日牟礼八幡神社…古くは大島郷と呼ばれていたこの地は、中世になって比牟礼荘が開発されると八幡神が勧請され、地域の人々の信仰を集めた。市名のおこりの神社。

★八幡堀…八幡城の内堀として、また琵琶湖水運の要衝として豊臣秀次開削した堀。かつて湖上を往来する船はこの運河をさかのぼって城下町に入った。

★八幡城…八幡山（鶴翼山）に豊臣秀次が天正十三年（一五八五）に築いた山城。現在、山頂には瑞龍寺が建っており、かつての本丸跡である。ここからは市街が一望でき、城下町の構成がよくわかる。ロープウェイを利用して登る。

★八幡公園・秀次居館跡…山麓の竹藪周辺が秀次の居館跡で、平常時はここで生活した。竹藪の左手は桜で有名な八幡公園で、秀次の銅像が立っている。

★瓦ミュージアム…近江八幡市の歴史をテーマとしたミュージアムで、八幡堀のほとりに佇む。瓦の魅力を活かした建物が実に美しい。

★本願寺八幡別院…　秀次が安土城から移築した市内随一の大寺院。慶長六年（一六〇一）家康が上洛した際の宿泊所となり、また、朝鮮通信使の昼食所にもなっている。

【実施要項】

《期日》十月七日(日)
＊雨天時は十月十四日(日)に順延。
《集合時刻》午前五時（厳守！）
《集合場所》ＪＲ福山駅改札口前
＊他駅からの参加も可能です。
《参加費》　会員　四八〇〇円
一般　五三〇〇円
＊切符持参の参加費は一八〇〇円（二三〇〇円）です。
（鉄道記念きっぷ代金［三〇〇〇円］・ロープウェイ代［三六〇円〈片道〉］・近江八幡市歴史民俗資料館入館料［三〇〇円］・瓦ミュージアム入館料［三〇〇円］・傷害保険料・資料代含む。ただし、現地のバス代［往復四〇〇円程度］は各自の負担です）
《募集人数》限定三〇名（申込順）
《講師》平田恵彦さん（副部会長）
《受付開始日》八月二七日（月）～
《申し込み》平田さん宅へ電話で
TEL〇八四九―二三―三七八一
（午後九時～午後十時、厳守！）
《その他》弁当と飲物を必ず持参のこと（食堂はありません）。歩きやすい服装・靴でご参加下さい。
＊ＪＲ福山駅帰着予定時刻は午後九時二三分です。
＊キャンセルは九月三〇日（日）まで、それ以後のキャンセルは不参加でも三二〇〇円いただきます。

古墳講座Ⅷ

【実施要項】

＊八月は夏休みで開催しませんのでご注意ください。
《座長》山口哲晶さん（部会長）
《開催日》九月二二日（土）
《時間》午後七時～午後九時
《会場》ふくやま市民交流館

古代吉備を語る会主催
夏季特別講演会開催

備陽史探訪の会と友好関係にある古代吉備を語る会（会長出宮徳尚氏）が、夏季特別歴史講演会を開催することになりましたのでご紹介します。

【実施要項】

《開催日》八月二五日（土）
《時間》午後一時～午後五時
《会場》岡山市立中央公民館第五ホール（岡山市立福祉文化会館五階、岡山市小橋町一―一―三〇）
＊駐車場がありませんので、公共交通機関を利用してご来場下さい。
ＪＲ岡山駅前から市電「東山」行きに乗車。電停「小橋」下車、旭川に沿って北に徒歩約三分。
《参加費》無料
《講師と演題》
▼秋山浩三先生
（大阪府文化財研究センター係長）
「弥生時代の国々」
▼劉富良先生
（洛陽市文物工作隊副隊長）
「最近の隋唐洛陽城跡発掘成果報告」
《問い合わせ》
古代吉備を語る会事務局
TEL〇八六―二二二―七七三〇
〒七〇〇―〇九八五　岡山市厚生町二―一二―一〇―八〇三（出宮方）

私考二題

門田　幸男

一、ほおずき市について

いま東京の浅草寺は、夏の風物詩、ほおずき市で賑わってる。しかし、ほおずきが何故この時期浅草寺で売られるのか、その本当の意味を知っている方はどれほどいらっしゃるだろうか。今回は、陰陽五行思想に基づいてこれについて考えてみたい。

ほおずきは赤い袋に赤い実が包まれている。この「赤色」がポイントなのである。

陰陽五行思想では、赤は火気の色であり、「火生土」の原理（註）というのがあって、火気と土気は相即の関係がある。土気とはすなわち大地のことで、万物を載せて育てる作用と、万物を殺して土に返す、二面の作用があると考えられている。

ほおずき市は旧暦六月未月の土用（土気が作用する）の最中に行われる。土用は四季の終わりに十八日ずつ分割されて挟み込まれている。土用の最中の行われる多くの行事は、次の季節につながる、あるいは新たな季節を迎える意味が込められていると考えられる。

ほおずき市の場合、ほおずきを買い育てることによって、土気の働きをほおずきの赤色（火気）で支援しようとしていると考えられるのだ。つまり、ほおずきの赤の呪力で、過ぎ去るべき暑気を殺し、来るべき爽快な秋を育てようというわけある。

会報七八号でも書いたが、京都の祇園祭も土用が始まるのに合わせて斎行される。春の終わりの土用月、丑（牛）の守護神牛頭天王の代理として、八白土気艮の象徴の稚児さんを載せて山鉾を京都の町を巡回させる。こうすることによって京都盆地の暑気を消し、冷涼な秋に転換させようという意思が込められているのである。

浅草寺で買ったほおずきを家に飾れば、その赤色（火気）によって強められた土気の作用で、わが家の暑気は消滅して爽快な秋の風が吹き込むに違いない。エアコンなどまったくなかった時代の人々の願いに浅草寺は応えようとしたのだろう。いまその意味を知っている人はほとんどいなくなってしまっているが…。

（註）火は土を生む。火が燃えた後には土（灰）が残ることから出た考え方。

二、石にこだわった斉明天皇

近年の発掘によって飛鳥京は「石の都」であることがわかってきた。そしてこの石の都を築造したのが斉明（皇極）天皇である。ここでは、何故この天皇が「石造」にこだわったかを陰陽五行思想に基づいて考えてみたい。

ご存じの通り、斉明天皇は女帝であり、天智天皇、天武天皇、間人皇女（孝徳天皇皇后）の母である。女帝は日本史上何人か存在するが、恒常的ではなく、女帝が誕生する場合には特殊な事情があったとされる。

中国には女帝がいない（唯一の例外が則天武后）。というよりも許されなかった。それには陰陽五行という思想的な背景があった。まず、これに触れないと斉明天皇の狂心の理由がよくわからない。

陰陽思想の一翼を担う易の八卦では、「母」は「坤」といい、自然では「地」を表す。それに対して「父」は「乾」といって自然では「天」を示す。地は万物を載せてそれを育むが、天が光と熱と水を与えることによってのみ成り立つ受け身の存在と考えられていた。男が与え、女がそれを受けて初めて生命が誕生するというのも同じ考え方である。

こうしたことから、国民に「与える徳性」をもたない女性は、帝王になる資格に欠けているとされた。女性差別的な考え方であるが、当時そう考えられていたのは事実である。

もちろん、飛鳥時代にはこうした中国の思想は伝わっており、斉明天皇も当然知っていたはずである。知っていながら、なお権力者になりたがる。それほど権力には魔力があるのだろうが、女帝としては安閑とはしていられない。

そこで斉明天皇は考えたのではないだろうか。乾（父・男）の事物で自らの周りを取り囲むことによって天子の徳性を得ようと。

地上に光と熱と水を降り注いで、万物を育てる天の代表、太陽が姿を現すのは「白昼」である。このように太陽の光は「白」とされていた。地上から見ると、太陽も月も円運動をしているように見えるから、古くから中国では宇宙を「天球」と呼び、丸いものと考えられていた。また、科学的思考とはまったく違うが、天（乾）は堅く、地（坤）は柔らかいものとされていたのである。

そこで天の性格、「白い」「丸い」「堅い」の三拍子揃ったものを斉明天皇は集めようとしたのではないだろうか。

たとえば、先頃発見された亀形石造物（新亀石）はまさにこれにあてはまる。周囲に敷き込まれた石も丸石も並べられている。飛鳥苑池遺跡も乾（天）の代替としての石の庭園

と考えることができるのではないか。

一方、一般に「須弥山石」と呼ばれている石造物（噴水施設とされている）は、その形は山ではなく、男根に似ている。斉明天皇は、自身に欠けている陽の気を、天の代替物としての石を集積することに飽きたらず、男根相似の石造物まで造ったのではないだろうか。

ところで、この天皇の諡（おくりな）は初めは「皇極」後に「斉明」となるが、この名前の表す意味について吉野裕子先生は次のように書いている。

「皇極とは、宇宙の支配者で北極星に宿るとされる神の名前であり、斉明とはその周囲を回って補佐するとされる北斗に宿る神の名前なのだ」

（『陰陽五行と日本の天皇』）

斉明天皇がどれほど「天」を意識していたのかわかるというものではないか。また、二人の息子の諡号（しごう）も「天智」「天武」であり、「天」が冠されているのである。

もとより、諡は天皇自身が名乗ったものではなく（斉明・天智時代には天皇号自体が未成立）、平安時代になってつけられたものである。しかし、こうした諡号が贈られたことにより、斉明・天智・天武が陰陽五行思想に傾倒していたことが、当時の通念であったと推測できる。

『掛迫第6号古墳墳丘測量調査報告書』待望の発刊！

『掛迫第6号古墳墳丘測量調査報告書』が、平成十三年七月一日に発行されました。

平成七年から八年にかけて、福山市駅家町にある掛迫第6号古墳の墳丘を測量した成果が、五年の歳月を経てこのほど形となって現れたのです。報告書には測量結果から判明したことが余すことなく、記されています。

その記述はできるだけ平易にするよう心がけられました。また、参加者の声が載せられるなど、一般の報告書とはひと味違った仕上がりになっています。しかし内容が低レベルというわけではありません。

報告書では、それまで前方後円墳説・円墳説と議論が分かれていた墳形を、測量および地中電気探査によって明確にし、前方後円墳と結論づけました。もちろん最終的には発掘調査によらなければ、墳形は確定できませんが、論争に一石を投じることができました。

報告書は三〇〇部作成し、国会図書館を始め近隣の図書館、大学・研究機関等関係各所に送付しました。献本した考古学会の諸先生方からも、すでに備陽史探訪の会の活動に対して高い評価が寄せられています。

たとえば、辰巳和弘先生（同志社大学助教授）からは次のようなお手紙を賜りました。

「この度は掛迫6号古墳の測量調査報告書をご恵送下さり、ありがとうございました。『在野の歴史愛好家の集まり』が実施した調査であったとしても、目的意識や調査手法と精度、またその歴史的考察が基本を踏まえているなら、立派な調査報告書です。最近はこのような活動が減りつつあります。どうか今後も、かような活動を続けられることを願っております。学恩に感謝申し上げますとともに、貴会のますますのご発展お祈りいたします」

この測量に参加した会員の方々には、七月中に報告書を一冊無料送付しました。ただ、会員であったとしても測量に参加されてない方には有料（一五〇〇円）での販売となりますのでご理解ください。これから会の諸行事で販売しますのでぜひご購入ください。また、郵送（送料実費）での販売もいたしますので、その旨、事務局までご連絡ください。

歴史小説読書会のご案内

※八月四日（土）の予定でしたが、十九日（日）に変更します。午後二時から市民交流館で『落日の王子 蘇我入鹿』を読みます。今まで参加された方には電話で連絡しましたが、七月行事案内を読み、四日に来られた方には深くお詫び申し上げます。

※十月は四日（土）に『聖徳太子憲法は生きている』（三波春夫著　小学館文庫　五五二円）を読みます。

歴史小説ではありませんが、大歌手三波さんの、玄人好みの歴史観を読んでみませんか。会場、時間は八月と同じです。ご参加をお待ちしています。

※お問い合わせは

種本実（五四―二〇四七）さんへ。

『備後古城記』を読む

【実施要項】

《座長》小林浩二（部会長代行）
《開催日》八月十八日（土）
《発表課題》常石城跡・茶臼山城跡
《開催日》九月十五日（土）
《発表課題》鞆城跡・大可島城跡等
《時間》午後七時～午後九時
《会場》福山市中央公民館
《会費》資料代として一〇〇円程度

Q&Aコーナー

Q＝古墳の形について教えてください。前方後円墳はどうして方形が前で、円形が後ろなのですか？

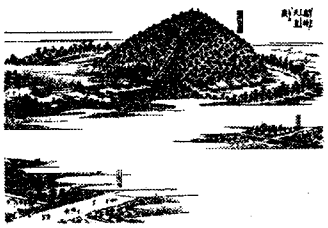
A＝この質問は私も幾度となく耳にしましたし、受けてきましたので早速お答えしましょう。

この「前方後円墳」という学術用語は円墳、方墳などを含めてもちろん古墳時代にあったわけではなく現代の考古学の造語に過ぎません。したがってどちらが前か後ろとかという前後関係を表現しているわけではなく方形と円形が接合した形を表しているにすぎないのです。

しかし、ご質問のように方形の部分が前で、円形の部分が後ろという前後関係があったような印象を与えるのもまた事実です。特に近畿地方にある陵墓や陵墓参考地になっている前方後円墳には前方部の前に鳥居を立てた拝所があり、いかにも前方部が前、つまり正面という印象を与えていますが、これは幕末から明治にかけて政治的意図により付加されたもので、事実、大阪府の誉田山古墳（伝応神天皇陵）は前方部側に拝所を設けるまでは後円部側から頂上まで参道があったことが絵図によってわかっています。こういう背景からも前方後円墳という語を避けて、鍵穴古墳とか方円墳などという語を使おうという試みもありましたが、現在では前後の認識不明という条件つきで前方後円墳という語が使用されているのです。いずれにしても前方後円形という日本独自の墳形については前方部の機能と役割の解明がこの墳形の謎を解くカギであるということはいえるでしょう。

さて前方後円墳という語の出所については江戸時代の尊皇論者である蒲生君平（一七六八～一八一三）が全国の天皇陵を踏査して著した尊王論の先駆となる『山陵志』という書物で使用したのが始まりだといわれています。蒲生君平（がもうくんぺい）は前方後円墳の側面形を中国の宮車にみたてて、車の進行方向で前後を考え命名したということです。

ちなみに福山市周辺には前方後円墳、あるいは前方後円墳の可能性の高い古墳は五基、前方後方墳、あるいは前方後方墳の可能性の高いものは二基あります。（山口哲晶）



誉田山古墳・後円部参拝道（『河内名所図会』より）

＊「Q&Aコーナー」では考古・歴史・民俗に関する質問を募集しています。基本的な事柄から難しい問題まで、わが優秀なスタッフが全知全能をかけてお答えします。

質問はハガキで事務局まで送ってください。原則として一枚のハガキに一問でお願いします。締め切りは会報の原稿締切と同じ日です。

★読者の広場★

イチロー談義

後藤　匡史

イチロー大リーグにて大活躍
みんな、そうおっシアトルよ。
一寸なまっている。
だってイチロー愛知（名古屋弁）
出身なも。
そりゃあ、あんマリナーズ。

沸きに沸くイチロー人気とかけて
煮えたぎったお湯と解く。
その心は――手がつけられない。

野球一筋
何たって真実イチロー（一路）

痛し痒しのプロ野球ファン
みんな涙を長島す。
王ーノオ（ON）

第九回郷土史講座

広島市北部の古墳について

―秋の古墳めぐりに関連して―

【実施要項】

《講師》安原誉佳さん（古墳部会）
《開催日》九月二九日（土）
《時間》午後二時～午後四時
《会場》福山市中央公民館
《参加費》一〇〇円程度（資料代）

【講座の概略】

秋の古墳めぐりでは広島市北部（安佐北区周辺）の古墳を探訪する計画なので、これに関連した話をしたい。

広島市北部では、弥生時代後期から古墳時代後期初頭にかけて太田川左岸を中心に墳墓が築かれる。その代表が西願寺墳墓群で、ここでは丘陵の最上方にあった弥生時代の集団墓から、下方の古墳時代前期の竪穴式石室までの系譜、変遷をたどることができる。

またこの地域には、三角縁神獣鏡を出土した中小田（なかおだ）一号古墳や古式の横穴式石室を有する湯釜古墳、太田川流域最大の前方後円墳を有する弘住（こうじゅう）古墳群など特色ある古墳が多い。

講座では、これらの古墳を概説した上で、この地域に早くから墳丘墓や古墳が築かれた背景にもできるだけ迫ってみたい。（安原記）

第八回郷土史講座

杉原氏の系図を読む

—「尊卑分脈」を中心として—

【実施要項】

《講師》木下和司さん（城郭部会）
《開催日》八月二五日（土）
《時間》午後二時～午後四時
《会場》福山市中央公民館
《参加費》一〇〇円程度（資料代）

【講座の概略】

杉原氏は伊勢平氏に属する家系である。その家祖・貞衡の名を取って貞衡流と呼ばれる。今回の郷土史講座では、「尊卑分脈」に載る貞衡流の系図にかかれている平安時代から鎌倉時代初期の部分を読み解いてみたいと思う。「尊卑分脈」の資料的価値については、備陽史探訪の会でも議論が分かれるところであるが、私は比較的信頼がおけるのではと考えている。その理由を杉原氏の系図を読み解くなかで明らかにしてみたいと思う。またこの時代の杉原氏は、時代の主役であった平忠盛、清盛、家盛、頼盛父子、源頼朝と深い繋がりがあった。これらの人々との関係から杉原氏がどのような武士であったか考えてみたい。（木下記）

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

事務局日誌

六月二日（土）
午後二時。歴史小説読書会。課題図書は『秀吉と武吉』。参加十名。於ふくやま市民交流館。

六月六日（水）
午後七時。役員会。参加十五名。於中央公民館会議室。

六月三日（日）
バス例会「作州の名刹本山寺を訪ねる」。参加四九名。講師平田恵彦さん。

六月十六日（土）
午後七時。「『備後古城記』を読む」。参加十四名。於中央公民館会議室。

六月二三日（土）
午後七時。古墳講座Ⅷ。参加十三名。於ふくやま市民交流館。

六月三十日（土）
午後二時。第六回郷土史講座「山内首藤氏と毛利氏の時代」。参加二五名。講師堤勝義さん。

七月十一日（水）
午後七時。役員会。参加十六名。於中央公民館会議室。

七月十五日（日）
▼午後二時。特別歴史講演会「石室の特色から備後地方の後・終末期古墳を考える」。参加約一二〇名。講師脇坂光彦先生。於広島県立歴史博物館講堂。
▼午後五時。脇坂先生慰労会。於駅北の「おくんち」。参加三五名。

七月二一日（土）
午後七時。「『備後古城記』を読む」。参加十三名。於中央公民館会議室。

七月二八日（土）
午後七時。古墳講座Ⅷ。参加十三名。於ふくやま市民交流館。

会報が変わります！

次号から会報の体裁が大きく変わります。会報は創刊時のガリ版刷りから、タイプ印刷を経て、現在のワープロ出しにいたるまで、いくつかの変遷を経てきました。

でも、今回が一番大きな変身。版型がB5版からA4版へと変わるのです。これは会報の活字が小さくて読みづらいという会員の声に応えるもので、活字を大きく読みやすくするための変更です。

新しくなる会報にご期待下さい。

九月バス例会
岩国周辺の史跡を訪ねる

【実施要項】

《講師》今村武美さん

《実施日》九月三〇日（日・雨天でも決行します）

《集合時刻》午前七時三〇分（厳守・集まり次第出発）

＊注意！今回は探訪地が遠方のため、集合時間が早くなっています。

《帰着予定時刻》午後六時半ころ

《集合場所》福山駅北口観光バス停（福山キャッスルホテル前）

《参加費》会員　四八〇〇円
一般　五三〇〇円
（傷害保険料・資料代・入館料［二〇〇円］・錦帯橋入場料［二二〇円］・ロープウェイ代［五四〇円］含む）

《募集人数》四八名（申込先着順）
＊五九名までは補助席で受付。それ以上の場合はキャンセル待ちです。

《申し込み》事務局に電話で

《受付開始日》八月三〇日（金）～

《受付時間》午後八時～午後九時

《その他》弁当・飲物は各自持参。また、歩きやすい服装・靴でご参加下さい。

【主な探訪予定地】

▼亀居城跡（大竹市）

関ヶ原の戦いの後、福島正則は芸備二ヶ国を与えられ、小方（現大竹市）・三次・東城・神辺・鞆に支城を築いた。

小方の城は慶長八年（一六〇三）から築城を始め、同十三年に完成した。その規模は周囲十八町（一九六〇m）、面積十町歩におよび山頂に本丸・二の丸・三の丸…と十一もの郭が築かれ、堀もめぐらされていた。しかし、この城は完成間もない慶長十六年（一六一一）に、幕府の圧力によって破却された。

亀居城と呼ばれる由来は地形が亀に似ているからだといわれている。

▼岩国城周辺（岩国市）

岩国は平安末期の岩国氏、その後は大内氏に属した弘中氏、そして毛利元就の支配が続いた。関ヶ原の戦い後は、出雲国富田月山城（十二万石）から、岩国三万石（後六万石）に移封された吉川広家により城が築かれ、近世岩国藩の幕が切られて城下町として発展した。

▽**岩国城跡**…慶長八年（一六〇八）、吉川広家によって築かれた。城山は横山といい、別名は横山城。元和の一国一城令で破却され、その後は山麓の藩邸が城の役目を果たした。現在は復原天守がある。

▽**錦帯橋**…錦川の清流に架けられたアーチ型五連の木橋。日本三奇橋の一つに数えられる。この橋は岩国藩三代藩主吉川広嘉が、錦川の出水のたびに橋梁が流失するので、延宝元年（一六七三）に当時の最新技術を用いて架橋したもの。

架橋以来、約二八〇年間、たびたびの洪水に耐え、その秀麗な姿を保っていたが、昭和二五年（一九五〇）の台風で流失、現在の橋は昭和二八年（一九五三）に再建されたものである。

▽**旧香川家長屋門**…元禄六年（一六九三）築造。岩国藩五家老の一人香川正恒居宅の長屋門。県指定文化財。

▽**その他**、吉川家墓所、旧目加田家住宅等を探訪する。

▼白壁のまち（柳井市）

柳井は古くから商業の町。江戸時代は岩国藩の納戸と呼ばれ、藩の産物が大阪に向けて出荷されていた。

古市、金屋地区には、船運で栄えた市場町、柳井津の面影を伝える白壁造りの商家が残っており、国の重要伝統的建造物保存地区に指定されている。

見所として、狭川醤油蔵、油の製造販売で財をなした国森家住宅、国木田独歩旧宅、光台寺（わんわん寺）などがあり、柳井の名の元になっている柳と井戸も探訪する。

なお、時間が余れば、通化寺（周東町）に寄る。通化寺は幕末維新の際、長州藩の遊撃軍の陣営が置かれ、四境の役の芸州口の本陣となった。

会報一〇三号の原稿募集

原稿締切　九月二二日（土）必着

時間の都合で掲載できない場合があります。早めにお送りください。

本文「一行一六字×一二〇行」でちょうど一ページです。以下三一行毎に一ページの一段になります。

四〇〇字詰原稿用紙を使用する場合は、下四字分を空白にして、一行一六字にして書いて下さい。

皆さんの会報です。身近な話題でもOK。どしどしお寄せ下さい。

【編集後記】

▼「備陽史探訪」一〇二号、いかがでしたか。いつもの号より内容が少し固かったかも知れませんが、たまにはこういうのもいいのでは？。

▼次号の編集は、あの「焼酎力（しょうちゅうりき）」氏の担当です。投稿者のみなさん、原稿の締切は必ず守って下さいね。

（磐座亭主人）

備陽史探訪の会事務局〒720-0061
福山市多治米町五―一九―八
☎〇八四九（五三）六一五七